No. 125

ティーブレイク

Tea Break

ガラスの森～ The Glass Forest ～

箱根の温泉地にあるガラスの森。入り口から直ぐにガラスの木があり，運良く晴れた日に行けると，葉っぱが日光を受けてキラキラと光る。園内には，ガラスの滝，ガラスの林といったような造形物があちこちに見られ，日の光を受けたガラス造形物が七色に輝いている。何と言っても，そうした様それ自体が美しいが，園の庭造りも素晴らしく，池の水とのコントラストも楽しめる。

しかしながら，人間にとって重要なのは，実は，ガラス造形物から来る七色の光にはない。人間の皮膚や遺伝子に甚大な影響を及ぼすのは，目に見えない紫外線である。そしてそこには，植物の光合成に必要なものも含まれている。つまり，人間の目を楽しませてくれる光の中よりもむしろ，目に見えない光のほうが重要であったりする。これが現実である。むしろ，綺麗な光のほうが，ある意味では幻である。現に，池の水面に写してみると，そこに七色の光は存在しない。

園内をしばらく歩くと，そこにはガラス美術館がある。もちろん綺麗なものばかりであるが，なかには，これが人間の手で作られたものなのかというほどに精巧なものもある。実際，ガラス細工というものは，作る人の精神状態を反映する。細工の最中の精神状態に歪みがあれば，精巧な細工をすることはできない。それも，ちょっとした小さなものであれば，その瞬間だけ精神を真っ直ぐにすることも，できるであろう。

しかしながら，そこにあったものは，かなり大きなものであった。

ところで，世の中というものは，歪みと矛盾に満ちているものである。淀みも多い。そうした中で，淀みも歪みもないものを作るというのは，その空間から一定期間，そこにあった淀みや歪みがそこから排されたことを意味する。むろん，その淀みや歪み，矛盾といったものは，解消されて消えてしまったわけではない。ただ単に，周囲に追いやられてしまった。ただそれだけのことである。

では，追いやられた淀みや歪み，矛盾といったものは，どこに行ってしまったのであろうか。宇宙空間に行ってしまうわけではない。それらが排された空間から一番近い周囲に，残存しているのである。しかもそれが増幅された形で。

してみると，たとえば，こういった精巧なガラス細工が作られた職人の家族というものは，悲惨であったかもしれない。“ガラス細工”のために，貧困や忍耐を強いられることだってあるかもしれない。

やはり世の中は，目の前にある“目に見えているもの”だけが全てではない。目の前にある人間の目を楽しませてくれるものよりも，目に見えないもののほうが重要であったりする。これが現実である。むしろ，その裏にあるもののほうが現実で，目の前にある実物のほうが，ある意味では幻である。

翻って，長い明細書なのにもかかわらず，全く誤記もなく，論理構成も完璧なものに出会うことが，たまにある。また，おそろしいくらいに完璧に活躍している弁理士に出会うこともある。そしてそうした人たちのリストは，さながらキラキラ光るものが集まったガラスの森の如くである。

しかしながら，大事な現実はむしろ，目の前に見えているものよりも，目に見えていないものにあることのほうが多い。であるからこそ，そういったものを見るたびに，ガラスの破片のような儚さと危うさを感じることもあるのである。

（正）